

女も働き続けるべきか？

吉 澤 昌 恭*

はじめに —— M字型就労形態の是非

1. 仕事と育児
 - 1.1. 女も経済的に自立すべきか？
 - 1.2. 専業主婦と夫の協力による子育て
 - 1.3. 共稼ぎ夫婦による子育て
2. 「共稼ぎ夫婦による子育て」を支える論拠
 - 2.1. 「母性」は本能ではない
 - 2.2. 近代の発明品としての「性別役割分業」
 - 2.3. 乳幼児期の子供を持つ母親が働いても子供に悪影響はない
3. 「働き続ける」ことになぜそれほどこだわるのか？
 - 3.1. 若い女性の専業主婦志向
 - 3.2. 子育てと人間としての成長
 - 3.3. 自己正当化
4. M字型就労形態のすすめ
 - 4.1. 新しい夫婦関係の模索
 - 4.2. 女性の再就職時の条件整備

はじめに —— M字型就労形態の是非

20歳代後半から30歳代前半にかけて、出産・育児のために仕事を辞める女性が多い。そうした女性の多くが、子供に手がかからなくなるにつれて、再び仕事を始め、そのため女性の就業率がM字型を描いてきた。女性の就労について論じる者の圧倒的多数が、こうしたM字型の就労形態から脱却することは「善」であり、そこからの脱却度を規準にすれば、日本は遅れている、と主張している。

* 広島経済大学経済学部教授

しかし、筆者はこうした考えに異を唱えたい。子供が産まれた後も母親が働き続けるということは、当の母親にとってもたいへん辛いことであるばかりか、母親の就労継続が子供に芳しくない影響を及ぼす、ということが懸念される。

たとえ子供が生まれようと女性は仕事を続けるべきである、と論じる人々は、「母親の就労継続は子供に悪影響を及ぼさない」と言う。いかなる根拠に基づいてそのようなことが言えるのか？ 筆者は、こうした主張には無理があると考えますが、なぜそうした主張が為されねばならないのか？ 本稿では、こうした問に取り組むことにしたい。

そうするに当って、大日向雅美氏の『子育てと出会うとき』⁽¹⁾ (1999) 並びに『母性愛神話の罨』⁽²⁾ (2000) をよすがとすることにしよう。1で、「専業主婦と夫の協力による子育て」と「共稼ぎ夫婦による子育て」について論じる。大日向氏は後者を推奨する。2で、「共稼ぎ夫婦による子育て」推奨の論拠を検討する。そこで挙げられてる論拠はいずれも脆弱なものである、と筆者は考える。なぜそのような脆弱な論拠に頼らねばならないのかを、3で、明らかにしよう。

最後(4)に、M字型就労形態の「よさ」について考えてみることにしたい。

1. 仕事と育児

1.1. 女も経済的に自立すべきか？

土肥伊都子氏は、妻の夫への経済的依存が夫婦関係に陰を落とすと考え、女も経済的に自立せねばならない、と主張する。同氏は次のように述べている。

「現在、まだまだ多くの一般的な家族の生活は、『男は仕事、女は家庭』にそったものとなっています。そして多くの人が自分たちは幸せな生活を送っていると考えています。たとえば、総理府広報室編(1998)の全国調査によれば、現在の生活に『満足している』割合も、『日ごろの生活に充実感』をもつものも、1958年以降、かなり安定して6割程度を維持しています。しかしこうした幸せな日々の家庭生活は、たとえば経済的に夫に依存している主婦の場合、離婚や夫の失業や病気などの不測の事態に陥ると、容易に消え去ってしまう可能性があります。」⁽³⁾

(1) 大日向雅美『子育てと出会うとき』NHK ブックス、平成11年。

(2) 大日向雅美『母性愛神話の罨』日本評論社、平成12年。

(3) 諸井克英・宗方比佐子・小口孝司・土肥伊都子・金野美奈子・安達智子『彷徨するワーキング・ウーマン』北樹出版、平成13年、118頁。

(アンダーラインと傍点は、吉澤が付した。)

離婚する可能性、夫が死んだり・病気になったり・失業したりする可能性をも考慮に入れれば、そして、妻が夫に経済的に依存していれば妻の立場は弱くなるが故に、女も経済的に自立しなければならない——これが土肥氏の主張である。

筆者は土肥氏の主張に非常に強い違和感を覚える。その主張を簡単に批判しておこう。まず「妻の夫への経済的依存」という言葉に対しては、「稼ぎの多寡のみによって有利・不利が決まる夫婦とはどんな夫婦だろうか？」という疑問を呈しておこう。しかし、筆者の違和感の源は、「離婚」「夫の病気・失業」についての言説にある。妻が専業主婦の家庭の夫が失業すれば打撃は大きいだろう。この打撃を少しでも小さくするために妻も働けというのだろうか？失業の防止・失業者の救済は、景気対策を行う中央銀行や政府・失業保険の所管官庁の任務であろう。

夫の病気に対して医療保障制度がある。また、夫の死亡に備えて生命保険に入ればいいではないか。しかし、何といても「離婚」について述べておきたいことがある。いったん結婚したら、とりわけ子供ができた後は、男女共離婚に至らないよう努力すべきである。離婚すれば、女だけではなく男も苦しむのではないか？子供がいれば、その子供が苦しむことはほぼ確実であろう。

土肥氏の主張を、男の側から編成替えをすれば、次のようなものになる。「^ち乳飲子を残して妻に病死されたら夫は大変な目に合う。だから、男たるもの結婚するのは考えものである。」

以上のような主張を展開する男がいるとは思えない。いるとしても、極く極く少数であろう。しかし、大日向氏はそれと似た主張を展開している。

《男は仕事・女は家庭》という性別役割分業体制も「よくよく検分してみると、実は男性にとっても砂上の楼閣に過ぎないことが判明するのである。

男性たちの城といわれてきたものの脆さや危うさをもっとも端的に露呈させたのが、父子家庭の父親たちの声であった…中略…離別や死別等の理由から父子家庭になって、男性が家庭の仕事をみずから担わなければならない状況におかれてみると、日本の職場は男性には家事・育児の負担がないことを前提として成り立っていることを嫌でも痛感させられるという。」⁽⁴⁾

(4) 大日向雅美『母性愛神話の罟』、153-154頁。

1.2. 専業主婦と夫の協力による子育て

子育ては大変つらいものであり、片手間ではできないものではない、と大日向氏は⁵縷述べている。そして、筆者もまったくその通りだと思う。

このことに加えて、「父親より母親の方が育児に適している」と筆者は考える。だとすれば、夫婦共稼ぎであったとしても、子供ができれば、妻は仕事を辞めて育児に専念し、夫も育児に協力するというのが、こと「子育て」に関する限り理想だと考えられる。

しかし、女性の就労という観点からすれば、問題は残る。この点については、4で再度検討することにした。

1.3. 共稼ぎ夫婦による子育て

「子供ができれば、妻は仕事を辞めて育児に専念する」という選択肢に、大日向氏は異を唱える。その理屈は奇妙なものである。一方で、妻が仕事を辞めると、妻一人に育児が押しつけられ・夫は益々仕事人間になる、と論じられ、他方で、妻が仕事を続けると夫の育児参加が促進される、と述べられている。

「子どもをもった女性は、その生活の大半が母である日常を余儀なくされる。そうして子育ての負担に時として苦悩しつつも、母親たちは子育てを通した成長感をしばしば口にする。

一方、一般的には子をもった男性が子育てを通した成長を語ることは少ない。子どもが生まれればなおのこと仕事人間となり、一家を支える責務が科せられるのが父親である。」(傍点は、吉澤が付した。)

「女性の社会参加は、就労を通した女性の自己実現のためであり、同時に経済的な自立の必要性として論じられるのが一般的である。そして、その意義はいうまでもないほどに当然なことであるが、同時に女性の就労が男性の家庭参加を可能にする方向に働くという観点からの論議も、さらに進められる必要があるのではないかと考える。」(傍点は、吉澤が付した。)

共稼ぎ夫婦による子育てが可能になるためには、保育所の存在が不可欠である。共稼ぎ夫婦と保育所による子育てに問題はないのか？ 問題はない、と大日向氏は

(5) 大日向雅美, 同上, 151頁。

(6) 大日向雅美, 同上, 218-219頁。

言う。

2. 「共稼ぎ夫婦による子育て」を支える論拠

子育ては大変つらいものであり、片手間でできるものではない。そして、「父親よりも母親の方が育児に適している」ということになれば、妻が専業主婦として育児の主演を演じ、夫が協力するというのが、「子育て」の理想となろう。

しかし、大日向雅美氏を初めとするフェミニストは、「父親よりも母親の方が育児に適している」ということを認めようとしない。一方で、「母性」は本能ではない、という主張が為され、他方で、「男は仕事、女は家事・育児」という「性別役割分業」は近代の発明品である、と論じられる。前者から始めることにしよう。

2.1. 「母性」は本能ではない

(1) 林道義『母性の復権』

林道義氏に『母性の復権』（1999）という著作がある。同書の第2章で、母性は本能である、という議論を林氏は展開している。そこでの議論は、①本能が現われるためには幾つかの条件が満たされねばならない（『母性の復権』第2章第1節）、②母親が子供を愛情をもって育てている例は地球上の多くの時代・地域に認められるし（『母性の復権』第2章第2節）、母性についてのシンボルは世界中に存在する（『母性の復権』第2章第3節）、という2つの要素から成り立っている。

第1の要素がより重要である。そして、この第1の要素は更に2つの部分に細分できる。第1の要素の内の第1の部分、「本能行動が現われるためには、複数の触発因子が必要である」というものである。林氏は次のように述べている。

「本能行動が現われるためには、必ず複数の触発因子（リリーサー releaser 解き放つ刺激）が必要である。

と同時に、その触発を妨げる要因が働かないことも必要条件になる。たとえば、人間の女性の場合ならば、『子どもを産んだ』という一つの要因だけで、自動的に母性本能が現われて子どもの世話をしたくなるというような単純なものでは決してない。…中略…

人間の母親の本能的な母性行動は、いくつものリリーサーによって触発される。たとえば妊娠中や分娩のときの、わが子が自分のなかにおり、自分から出たという一体感、幼児の笑顔、泣き声、乳を吸われる感覚、それらによるホルモンの分

泌など、複数の感覚的なサインが母親の母性本能を刺激することが実証的な研究によって証明されている。母性本能は産んだという一つの物理的な事実によって触発されるのではなく、多分に心理的な効果をもつ子どもからのいくつものサインや、子どもとのコミュニケーションによって触発される。⁽⁷⁾ (傍点は、吉澤が付した。)

林氏の議論の第1の要素の第2の部分は、本能には、(i) 他者から教わらなくとも自動的に発現するものと、(ii) 学習を通して発現するものの2種類がある、という主張である。⁽⁸⁾ 高等動物になるにつれて、自動的に発現する本能行動は少なくなっていく、学習の比重が増えてくる。そして、「その学習はまったく恣意的・偶然的になされるのではなく、生得的なプログラムに従ってなされるのである。⁽⁹⁾」

(2) バダンテール『母性という神話』

フェミニズムの概説書等では、バダンテールの『母性という神話』⁽¹⁰⁾によって、「母性は本能ではない」ということが証明された、ということになっているけれども、筆者はそうは考えない。バダンテールが明らかにしたことは、「子供との定期的な接触から、母親の子供に対する愛情が生まれる」(『母性という神話』第2部第1章)ということのみである。従って、『母性という神話』におけるバダンテールの主張と、『母性の復権』における林氏の主張は、完全に両立可能である、と筆者は考える。(そういった意味では、翻訳書の題名はミスリーディングなものである。)

バダンテールは、『母性という神話』の第1部で、家父長制やその下での愛なき結婚・愛なき子育てを論じた後、第2部で、母親の愛情に基づいた子育てを論じている。そして、第3部で、女性は母親役割に閉じ込められ、家庭に縛りつけられるようになって行った、という議論が展開される。その後のフェミニズムの展開にとっては、『母性という神話』の第3部が最も重要である。その点に関しては、拙稿「フェミニズムと家族(1)」(『広島経済大学研究論集』第27巻第1号、2004年6月)の5-7頁を参照されたい。

『母性という神話』の第1部第2章～第3章で、18世紀のフランスで里子の習慣

(7) 林道義『母性の復権』中公新書、平成11年、64-65頁。

(8) 林道義、同上、67-68頁。

(9) 林道義、同上、68頁。

(10) Badinter, Elisabeth: *L'Amour en plus — Histoire de l'amour maternel, XVII^e-XX^e siècle*, Flammarion, Paris 1980. (鈴木晶訳『母性という神話』ちくま学芸文庫、平成10年)。

があった、ということバダンテールは指摘している。つまり、母親は自分の手で我が子を育てなかった、ということである。

その子育ての状態は劣悪であった。これに対して、新興ブルジョアジーの妻たちは、子育てという母親役割を引き受け、これによってその地位は上昇して行った——これが『母性という神話』の第2部第2章で論じられていることである。

(3) 大日向雅美 —— 母性は本能ではない

筆者は、『母性という神話』でのバダンテールの主張（子供との定期的な接触から、母親の子供に対する愛情が生まれる）と、『母性の復権』での林氏の主張（母性は本能である）とは完全に両立可能である、と考えている。しかし、大抵のフェミニストはそうしたことを認めないであろう。大日向氏もそうである。同氏は次のように述べている。

「フランスの教育哲学者バダンテール…中略…は、十八世紀後半のパリの人口統計から、当時一年間にパリで生まれた乳児二万一千人のうち、母親の元で育てられた乳児はわずか千人に過ぎなかった実情を明らかにしている。…中略…

当時のパリでは、母親がわが子を育てる習慣がなかった事実を明らかにしたバダンテールは、母性愛は女性の本能ではないと明言している。⁽¹¹⁾（傍点は、吉澤が付した。）

筆者は、バダンテールの『母性という神話』を精読したが、「母性愛は女性の本能ではない」と明言されている箇所を見出し得なかった。勿論、筆者に読み落としがあった可能性は否定できない、ということは付け加えておきたい。

いずれにせよ、大日向氏の推論は粗雑である。同氏は、「母親がわが子を育てる習慣がなかった」ということが、「母性愛は本能ではない」という主張の論拠となると考えている（ように見える）ことは、上の引用文から分かる。「母親がわが子を育てる習慣がなかった」という事実だけでは、「母性愛は本能ではない」という主張の十分な論拠となり得ない、と筆者は考える。

大日向氏は次のようにも述べている。

「子どもが生まれたら仕事を辞めて母親が育てるべきだという人々に、その理由

(11) 大日向雅美『母性愛神話の罫』、88-89頁。

を尋ねてみると、判で押したように『古来から女性が子を産み、乳を与えて育ててきた。それが自然だから』という答えが返ってくる。そうした観点に立てば、共働き家庭が乳幼児期から保育園に子どもを預ける現象は、人間の自然に反した子育てとなる。しかもこうした考え方は一般の人々だけではなく、子育てについての指針を示す立場の人々の中にも根強いものがある。たとえば小児科医や教育評論家等の中には、乳幼児期の子育ては母親が専念すべきだとする持論を披露する人がいるが、その根拠を尋ねると前述のものと大差ない回答が返ってくる。⁽¹²⁾ (傍点は、吉澤が付した。)

2.1.(1)で紹介した林氏の主張は「判で押したよう」なものでないことを指摘しておこう。

さて、母性愛は本能ではない、と大日向氏は言う。しかし、今日では、母性愛という「概念」「言葉」が存在する。それらはいつ生まれたのであろうか？「母性愛なる概念は、資本主義の台頭と共に誕生した近代家族の存続に必要とされた理念であり、性別役割分業体制が敷衍化されていく過程で生じたものである」⁽¹³⁾と大日向氏は述べている。

次に、「性別役割分業」について論ずることにしよう。

2.2. 近代の発明品としての「性別役割分業」

(1) 古来、母が子育ての主たる担い手であったわけではない

『子育てと出会うとき』で、大日向氏は、「古来、母が子育ての主たる担い手であったわけではない」という議論を展開している。⁽¹⁴⁾江戸時代には男性も子育てに関わっていたし、⁽¹⁵⁾明治、大正から昭和初期頃までの農村では、村ぐるみ・家ぐるみの子育てが行われていた、⁽¹⁶⁾と大日向氏は言う。

そして、女は育児に専念し・男は仕事に行く（女は家庭・男は仕事）といった「性別役割分業」は、産業革命と共に生まれた、⁽¹⁷⁾というのである。

(12) 大日向雅美，同上，88頁。

(13) 大日向雅美，同上，89頁。

(14) 大日向雅美『子育てと出会うとき』，143-148頁。

(15) 大日向雅美，同上，148-150頁。

(16) 大日向雅美，同上，150-152頁。

(17) 大日向雅美，同上，154頁。

(2) 「社会保障制度」と「性別役割分業」

フェミニストは、「性別役割分業」を排斥しようと躍起になっている。その理屈は2つの部分から成り立っている。①「性別役割分業」は近代になって発明されたものである。②従って、その歴史はたかの知れたものであり、やがて消滅するし、消滅させるべきである。

①の当否については、2.2.(3)で論ずることにしよう。

さて、医療保険や年金保険をその中軸とする「社会保障制度」は20世紀の発明品である。このことに異論のある者は存在しないであろう。それが20世紀の発明品であるという事実は、「やがてそれは消滅する」といった予測や「それを消滅させるべきである」といった価値判断を正当化するものではない、ということは容易に理解されよう。筆者は社会保障制度は消滅させるべきではない、と考えている。そして、それが消滅しないようにするためには、不断の制度改正が必要になる。

同じような議論が、「性別役割分業」(やそのひとつの帰結としての「専業主婦」)にも当てはまる。「性別役割分業」が仮に近代の発明品であったとしても、このことは、「性別役割分業は消滅する」といった予測や「それを消滅させるべきである」といった価値判断を正当化するものではない。

しかも、「性別役割分業は近代の発明品である」という主張は、相当の眉唾物なのである。

(3) 「男は狩、女は家事・育児」と脳の進化

1980年代後半から、コンピュータを利用した脳のスキャン装置が登場したおかげで、脳の断面を「生きたまま」観察して、精神という広大な領域を垣間見ることが可能になったという事実を、ピーズ夫妻は、その著『話を聞かない男、地図が読めない女』⁽¹⁸⁾で指摘している。かくして、男女の違い、とりわけ、男女の脳の働きの違いについての研究が盛んになったのである。そして、男女の脳の配線とホルモンが男女の思考・行動を決定する、ということが明らかになってきた。

脳科学は、男女の脳の働きの違いについては説明するが、その違いがいかにして生じたか、を説明することはない。それを説明するひとつの「仮説」として、「長年に及ぶ男女の役割分業が、進化の過程を介して、脳の男女差を生み出した」という理屈を、ピーズ夫妻は提示している。

(18) Pease, Allan / Pease, Barbara: *Why Men Don't Listen and Women Can't Read Maps*, Orion-PTI 1999, Orion Books 2001, p. 5. (藤井留美訳『話を聞かない男、地図が読めない女 男脳・女脳が「謎」を説く』主婦の友社、平成12年、20頁)。

「男と女が異なる進化をしてきたのは、その必要があったからだ。男は狩りをし、女は木の実や果実を採った。男は守り、女は育てた。それを続けた結果、両者の身体と脳は、まったく別ものになった。

男女の身体は、それぞれの役割に合わせて発達していった。たいていの男は女より背が高く、力も強くなった。そして脳のほうも、役割に応じて進化していった。

こうして何百万年ものあいだに、男と女の脳はちがう方向に進化していき、その結果、情報の処理のしかたまで変わってきた。いまや男と女では、考えかたはもちろん、理解のしかた、優先順位、行動、信念までことごとくちがう。⁽¹⁹⁾ (傍点は、吉澤が付した。)

「性別役割分業」は近代の発明品である、とフェミニストは言う。それに対して、脳科学での知見をベースにして、ピーズ夫妻は、「性別役割分業」は何百万年にも及ぶものである、と言う。筆者はピーズ夫妻の方に軍配を上げたい。筆者は、『ジェンダー・ステレオタイプ』と『ジェンダー・フリー』(『広島経済大学研究論集』第28巻第2号、2005年9月)で、その根拠(の一端)について論じた。

男女の脳の働きの違いの「起源」がどうであれ、その違いの存在そのものに疑問の余地はない。そして、「女の方が男より育児に適している」という常識が、科学的に証明されつつある。

「性別役割分業は近代の発明品である」とか「母性愛は近代家族と共に生み出されたものである」といった主張には相当無理があるのではないかとにかく、フェミニストの主張には無理が多い。その中でも最悪のものが、「乳幼児期の子供を持つ母親が働き続けても子供に悪影響はない」という主張である。

2.3. 乳幼児期の子供を持つ母親が働いても子供に悪影響はない

「共稼ぎ夫婦による子育て」を推奨する者は、「父親より母親の方が育児に適している」という主張を論破しなければいけないだけではない。(そして、それを論破できているとは思えない。)それに加えて、「乳幼児期の子供を持つ母親が働き続けられれば、子供に悪影響が出るのではないか」という大抵の人々の抱く懸念を払拭しなければならぬ。大日向氏は、そのための涙ぐましい(としか筆者には思えない)努力をしている。

(19) Pease, Allan / Pease, Barbara, *ibid.*, p. 5. (同上, 19頁)。

(1) 主たる養育者との絆

乳幼児期の子供を持つ母親が働き続ければ、日中の子供の保育は、保育園等の家庭外の施設や他者に委ねられることになる。このようなことは子供の発達に悪影響を与えるのではないか？

「発達初期に母性的な養育が剥奪されると、子供的人格発達に多大の悪影響が出る」というボウルビイの説、並びに「乳児期は基本的信頼感を獲得し、基本的不信感を克服すべき時期である」というエリクソンの説に、大日向氏は言及している⁽²⁰⁾。もし、ボウルビイの説やエリクソンの説を受容するなら、乳幼児期の子供を持つ母親は、仕事を辞めて子育てに専念するのが「望ましい」、と大抵の人は考えるであろう。ところが、大日向氏はそうは考えない。

「これらの理論（ボウルビイやエリクソンの理論のこと、吉澤註）を、乳幼児期の子どもをもつ母親の就労を否定的に捉える根拠にするのは、不適切といわざるを得ない。なぜなら、主として次の二点を配慮する必要があると考えるからである⁽²¹⁾。」

その2点とは、以下の通りである⁽²²⁾。

1. 人間は生涯にわたって発達し変化する可能性をもつものであり、三歳までの母子関係がその後の不適応行動の原因と考えるとすれば、いわゆる窮屈な幼児期決定説をとることに他ならない。
2. 乳児の愛着の対象をなぜ母親に限定して考えなければならないのか疑問である。

上述の、大日向氏の2つの主張の内、第1のものを筆者は理解できない。他方、「子供の愛着の対象を母親に限定する必要はない」という主張こそ、大日向氏の思考の中軸を成すものである、と筆者は解釈する。

(2) 母親から離れるのを嫌がって泣き叫ぶ子供

人々が乳幼児期の母親の就労に難色を示すのは、保育園に入園した当初の子供が、

⁽²⁰⁾ 大日向雅美『母性愛神話の罫』、135-136頁。

⁽²¹⁾ 大日向雅美、同上、136頁。

⁽²²⁾ 大日向雅美、同上、137頁。

「母親から離れるのを嫌がって泣き叫んだり、後追いする現象が見られる」からであり、子供が「かわいそう」という実感こそが、「母親の就労を悪とする信念」を生んでいる、と大日向氏は言う⁽²³⁾。

この「かわいそう」に対して、大日向氏は3つのことを述べている⁽²⁴⁾。

1. 登園時に母親に対して子供が示す分離不安反応の強さは年齢によって一様ではない。
2. 同じ保育園に預けられる保育園児であっても、親子関係のあり方によって、分離不安反応の遅速やその程度に差がある。
3. 三歳未満児が保育園生活に適應できるか否かに関して、保育園での保育の質も重要な要因である。

(3) 複数マザーリング

主たる養育者が保育園と家庭とで複数存在する場合、母親的役割を担った不特定多数の人物が養育に当るために、子供と養育者の関係が不連続になることから生じてくるのが、「複数マザーリング」の問題である⁽²⁵⁾。この点に関して、大日向氏は次のように述べている。

「この『複数マザーリング』に関しては、家庭保育であっても祖父母らの養育をうける場合があって、保育園児だけの問題ではないのであり、むしろ、乳児はある程度複数マザーリングを受けながら、その中で主たる養育者に愛着の形成ができるようにする配慮が必要だとする…中略…指摘もある。」⁽²⁶⁾

以上のように述べられた後、「かつての村落共同体での子育ては、まさに家ぐるみ、地域ぐるみで行われており、むしろ複数マザーリングが適切に機能をしていたと考えられる⁽²⁷⁾」と論じられている。[「家ぐるみ・地域ぐるみ(村ぐるみ)の子育て」に関しては、本稿2.2.(1)でも言及した。]

(23) 大日向雅美，同上，138頁。

(24) 大日向雅美，同上，138-139頁。

(25) 大日向雅美，同上，139-140頁。

(26) 大日向雅美，同上，140頁。

(27) 大日向雅美，同上，140-141頁。

(4) 子供がかわいそう

働く母親に対する周囲の干渉に対して、大日向氏は苛立ちを隠さない。同氏は次のように述べている。

「働く母親の前に立ちはだかる周囲の干渉は、なかなか厄介である。育児休業が明けて会社に復帰しようとする時、舅姑や実父母が孫が哀れだといって泣くという。お母さんが働いていて子どもがかわいそう、さみしい思いをさせているのではないかという近所の人の目もある。」⁽²⁸⁾

更に、大日向氏は次のようにも述べている。

「乳幼児をもつ母親が育児に専念する生活を選ぶ自由は尊重されるべきである。しかし、乳幼児期に母親が育児に専念しなければ、子どもが将来こころに深い傷を残すとする説は必ずしも正しいとは思われない。むしろ、単に想像の範囲のものであったり、あるいは母親が働いていて幼少期に味わったさみしさにこだわるあまり、働く母親がなぜわが子にさみしい思いをさせざるを得なかったかについて広い視野からの検討を欠いたものであろう。」⁽²⁹⁾（アンダーラインと2種類の傍点は、吉澤が付した。）

「乳幼児期に母親が育児に専念しなければ、子供に悪影響が出る」という主張の論駁に、大日向氏は成功していない、と筆者は考える。また、育児に専念することを選んだ女性に対して、大日向氏は敬意を払っていないように、筆者には感じられる。(3.1.～3.2.でそれについて論じる。)

勿論、世の中には、夫との死別等によって「わが子にさみしい思いをさせざるを得なかった」女性も存在しよう。しかし、今日、我が子を保育園に預けて仕事をしている女性のすべてがそうである、とは考えにくい。

大日向氏の主張には非常な無理がある。なぜここまで無理をするのだろうか？そこには秘められた動機があるに違いない。

(28) 大日向雅美, 同上, 147頁。

(29) 大日向雅美, 同上, 149頁。

3. 「働き続ける」ことになぜそれほどこだわるのか？

3.1. 若い女性の専業主婦志向

(1) 自ら進んで仕事を辞める女性への批判

子供が産まれても働き続ける女性がいる一方で、出産を契機に仕事を辞める女性も多い。後者の内には、周囲の暗黙のプレッシャーに負けて、いやいや仕事を辞めた女性もいるだろうが、自ら進んで仕事を辞める人も多いに違いはない。この点は、大日向氏も認める所である。

「子育ての支援策の一つとして、保育所機能の充実が検討されてはいるが、働き続けたいと思っても、乳幼児期は母親が子育てをするのが子どもにとって最善だとする周囲の暗黙のプレッシャーに負けて、仕事を辞めざるを得ない女性は少なくない。また働き続けている場合には、周囲の目を気に病み、子どもに何かあるごとに自分自身もまた後ろめたさを覚える母親たちがいかに多いことか。一方、若い女子学生に自身のライフコースを設定させてみると、将来子どもを産んだら母親の自分が育てたいから、仕事は辞めるという考えを表明する者が少なくない。」(アンダーラインと傍点は、吉澤が付した。)

「共稼ぎ夫婦による子育て」の推奨者にとって、「自ら進んで仕事を辞める女性」の存在は厄介なものであろう。大日向氏は、そうした女性を批判している。上に引用した部分に続いて、次のように述べられている。

「女性の生き方が多様化しているといわれる今日ではあるが、従来の母性観の威力はけっして衰えてはいない。そうした神話の威力に押されて子育てに専念する生活を送っている母親たちの育児ストレスもまた、二十余年前に比べて少しも変わらず、むしろ強まっている傾向が認められる。」(傍点は、吉澤が付した。)

「自らの手で子供を育てるために仕事を辞めた女性」も、実は「乳幼児期は母親が子育てをするのが子どもにとって最善」といった、事実でも何でもなし・単なる「神話」に踊らされているに過ぎない、と言わんばかりの主張である。次のような叙述もある。

(30) 大日向雅美，同上，14-15頁。

(31) 大日向雅美，同上，15頁。

「最近強まっている傾向として若い女子学生たちの専業主婦願望、母性回帰現象を指摘しなければならない。…中略…従来にも増して母親になることに大きな価値を見出しそうとする傾向は、ここ数年顕著になっている。その背景として考えられるのは、男性並みに働くことが難しい社会の現実を女性たちが察知しているからであろう。⁽³²⁾」(傍点は、吉澤が付した。)

「母親になることに大きな価値を見出しそうとする傾向」を、大日向氏は素直に喜べないようである。確かに、こうした傾向の背景に「男性並みに働くことが難しい社会の現実」があることは否定できない、と筆者も考える。しかし、そうした傾向の背景に、働く母親の下でさみしい思いをした若い女性達の「自分の子供には同じようなさみしい思いをさせたくないという心情」も存在するのではないか？ そのように考える若い女性達は健気である、と筆者は思う。しかし、大日向氏は、若い女性（並びに男性）の、そうした考え方に難癖をつけるのである。

(2) さみしかった記憶へのこだわりに対する批判

大日向氏は次のように述べている。

「幼少期の回想ではやはり『さみしい』と感じている人は多い。専業主婦を母にもつ友だちがおやつをもらっている様子をうらやましく思ったりした人も少なくない。しかし、保育園生活を楽しいと記憶し、母親が働くことは自分の家では当たり前であったと、あっさり受け入れている人が多い。むしろ、思春期以降になると、母親が仕事を懸命にこなし、前向きに働いている姿を理解できるようになり、幼少期のさみしさの記憶を乗り越えて、高い評価を与えている〔母親の就労に関して、1994年に、『働く母の会』によって実施されたインタビューに対する〕回答が多く見られている。」(傍点は、吉澤が付した。また、〔 〕内は吉澤が挿入した。)

上の文章からは、「幼少期のさみしさの記憶を乗り越え」た人は立派である、というニュアンスが感じ取れる。これに対して、「幼少期の記憶」を克服できない人もいる、と大日向氏は言う。

(32) 大日向雅美、同上、16頁。

(33) 大日向雅美、同上、145頁。

「なかには幼少期のさみしかった記憶に⁽³⁴⁾こだわり、子どもをもった後は自分自身は専業主婦になるという女性、あるいは妻には育児に専念してもらいたいという希望を訴える男性⁽³⁴⁾」もいる。(傍点は、吉澤が付した。)

上のように考える男女に対する、大日向氏の気持ちは、相当屈折しているようである。

(3) 「こんなはずではなかった」と後悔する日も遠くない (?)

大日向氏は次のように述べている。

「母となり、子どもを育てることに夢膨らませる女性たちが増えること自体はけっして問題ではない。むしろ望ましいことでもあろう。問題は彼女たちが『こんなはずではなかった』という言葉⁽³⁵⁾を口にするのも、またそれほど遠くないことなのである。」

上の文章からは、「子育てのために自ら進んで仕事を辞めようとする若い女性」の扱いに手を焼いた、大日向氏の「歯がみ」が聞こえてきそうである。

3.2. 子育てと人間としての成長

大日向氏は、「自ら進んで仕事を辞めようとする若い女性」を非難するばかりか、子育てに専念する専業主婦^{おとし}を貶めてもいる。そこでの議論は、①ご都合主義的な議論、②支離滅裂な議論、③子育てに専念する女性を見下した議論、に分類できる。

(1) ご都合主義的な議論

人を教えたり・育てたりすることによって人間は成長する、と一般論として言えよう。勿論、それは一般論として言えるのであって、例外は存在する。

筆者は大学教員として、20年以上に渡って学生の教育に携わってきた。このことによって、自分が何程か成長できたと感じている。また、筆者は、専業主婦の妻と協力して、2人の娘を育ててきた。子育てには大変なことも多いが、楽しいことも多い。そして、筆者も妻も子育てによって成長できた、と思う。

さて、大日向氏は、「一般論として、母親は子育てによって成長する」というこ

(34) 大日向雅美, 同上, 146頁。

(35) 大日向雅美, 同上, 59頁。

とを素直に認めたがらない。同氏は次のように述べている。

「たしかに母として子育てから得るものは少なくないであろう。しかし、同時に失ったもの、あるいは不要なものをまどってしまふことはないのだろうか。私自身を振り返ってみても、子育てで奮闘した日々の中で、わが子かわいさゆえの母のエゴもまたしっかりと身につけてしまったと自戒の念に苛まれることがある。子育てが母親を人間的に成長させる面ばかりを強調する母性観は、年と共に身につく贅肉をみようとしないという点で、これまた大いなる神話であるといえよう。

さらに問題なのは、この神話に依存した母親たちが子どもをもたない同性に対してこのうえなく厳しい目を向け、差別的な言葉を発することがある。『女性は母親になって人間的に成長する』とは、母性賛美の際の常套句でもあるが、それは『子どもを産んでいない女性は未成熟。人格に丸みがない』という言葉となつて、子をもたない同性を非難する凶器に容易に変身していく面を見過ごしてはならない。⁽³⁶⁾」(傍点は、吉澤が付した。)

「人が人間的に成長する」と言う場合には、「自分のエゴを相対化し・コントロールする」といったことや、「他人に対して思いやりが持てる」ということが含まれているのではないか？「わが子かわいさ故にエゴ丸出し」であったり、「子供を産んでいない女性に対して思いやりのない言葉を発する」ような人は、人間的に未成熟ではないのか？

大日向氏には、一般的傾向と例外の混同があるが、その点は大目に見ることにしよう。しかし、大日向氏の「父子家庭の父の子育て」に対する手放しの賛美振りには、看過し難いものがある。同氏は次のように述べている。

「東京女性財団の研究によれば、父子家庭の父親の多くは、周囲の偏見や経済的困難、そして、何よりも親としての自分自身のコンプレックスと戦いながら、子どもとの生活に仕事の世界では味わえない新たな意義と喜びを見だし、あるいは子育てを通して自分自身の成長に思いを馳せている。『父子家庭になったために、かえって両親が揃っている家庭の父親よりも、もっと一所懸命に人生を生きているという気がする』という述懐も偽らざる実感であろう。

こうした父子家庭の父親に比べて、妻に育児を依存しきって、第三者的な立場

(36) 大日向雅美、同上、21-22頁。

から良い父親でありたいと願う父親たちに、果たして父としての成長があり得るのか疑問である。」⁽³⁷⁾(アンダーラインと傍点は、吉澤が付した。)

筆者は、妻に子育てを任せ切りにしたこともなければ、自分の娘たちに第三者的態度で接したこともない。世の中には、子育てに際して妻に十分(あるいは、不十分ながらも)協力している男はたくさんいるに相違ない。世の中には、「必死に子育てに励む父子家庭の父親」と「自分の子供に対して第三者的な態度で接する父親」しかいないように論ずる、大日向氏の論じ方に、筆者は違和感を感じるが、まあそれはよい。

しかし、育児に専念する女性の成長にはしこたま留保条件をつけておきながら、父子家庭の父の成長は手放しで賛美する、という態度は許容し難い。それはご都合主義である、と筆者は考える。

(2) 支離滅裂な議論

男も女も、通常、子育てによって成長する。しかし、例外もある。この点をしっかり押さえておけば、混乱は生じない。しかし、大日向氏はそれをしないので、『母性愛神話の罨』におけるある部分での議論が支離滅裂なものになっている。

「私は子育てが人をいっさい成長せないとっているのではない。子育ての苦労や喜びを通して、人は多くのものを学び得ると考えている。しかし、それが母となった女性だけに許される特権であるかのように特別に意味づけされる弊害を指摘したのである。

人が子育てによって成長するのであれば、父親もまた子育てにかかわる必要性がある。女性の成長が母となる過程に傾斜して論じられる背後には、育児をもっぱら女性に託す現実が存在している。そうして育児による女性の成長論が女性の社会参加を阻む壁となるばかりでなく、育児に専念して社会から隔絶された虚しさや焦りに苦悩する母親が、一方で育児にストレスを溜め、他方で、母子密着を余儀なくされて、滅私的に育児に埋没せざるを得なくなる…中略…こうした現実に直面し、子どもへの愛情と信じた行動が自己愛の化身に過ぎず、子どもを呪縛していることを理解できない事態も招きかねない。

そうして、母となって自身が成長したと頑なに信じるようになると、母となら

(37) 大日向雅美、同上、157頁。

ない同性に対する共感を失って、人間的な成長の過程を踏んでいないといった穿った非難の目を向けもするからである。」⁽³⁸⁾

上の文章を何度読み返してみても、大日向氏が何を言いたいのか、筆者にはさっぱり分からない。

(3) 子育てに専念する女性を見下した議論

とにかく、大日向氏は、子育てに専念する専業主婦が嫌いなようである。同氏は次のように述べている。

「母としての誇りを語るわりには、その雰囲気になぜか余裕を感じられない人生の先輩である母親たちのこわばった顔を前にして、母性愛を疑う旨の発言は、子育てに全力を尽くしてきた女性たちに対する侮辱と受け取られる危険性が少なからずあることを実感した。就労の機会に恵まれず、子育てに専念し、それを生き甲斐とせざるを得なかった母親たちにとっては、母性愛のすばらしさを力説することによって自らの人生や存在の意義を主張するしか方法がなかったのであろう。少なくとも母親の愛情の絶対性に疑問を差し挟むような発言をする場合には、慎重に言葉を選ぶ必要があるということも学んだのである。」⁽³⁹⁾（傍点は、吉澤が付した。）

「子どもを産み母となった女性は、育児負担に喘ぎつつも、いつしか母性愛神話に身を委ね、母性愛賛美を唱和する立場に身を置くようになる。みずからを賛美しなければやりきれないほど、育児の責務が重いという理由もあるのではあろう。」⁽⁴⁰⁾（傍点は、吉澤が付した。）

上の2つの引用文にある、「母としての誇りを語るわりには、その雰囲気になぜか余裕を感じられない人生の先輩である母親」「就労の機会に恵まれず、子育てに専念し、それを生き甲斐とせざるを得なかった母親」「母性愛のすばらしさを力説することによって自らの人生や存在の意義を主張するしか方法がなかった」「みずからを賛美しなければやりきれない」といった言葉は、驚くべきものである。それ

(38) 大日向雅美，同上，207-208頁。

(39) 大日向雅美，同上，28頁。

(40) 大日向雅美，同上，185頁。

らは、「就労の機会に恵まれ己れを高しとする」人物（即ち、大日向氏のこと）の、あまりにも傲慢で・人を見下した態度を垣間見させてくれるものである。

3.3. 自己正当化

母性は本能ではない（2.1.）、「性別役割分業」は近代の発明品である（2.2.）、乳幼児期の子供を持つ母親が働き続けても子供に悪影響はない（2.3.）と高言し、「子供が生まれたら自ら進んで仕事を辞めよう」と考えている若い女性を非難し（3.1.）、子育てに専念する女性を見下す（3.2.）——これが、『子育てと出会うとき』『母性愛神話の罫』を読んで、筆者が感じ取った大日向氏の姿勢である。なぜこのような無理無体をするのか？何か隠された動機があるとしか考えられない。

(1) 苦しみたくない

お母さんが働き続ければ、子供がさみしい思いをしてかわいそうじゃないか、という主張に、大日向氏は異常なまでに反発する。

『子供がかわいそうでしょ』。保育者が、子どもを保育園に預ける母親に向かってよく使う言葉である。あるいは「—— のときぐらい、お母さんが家でお子さんを見てあげて」という言葉も、同様に保育者の言葉の中で使用頻度の高い言葉である。「——」には、たとえば『子どもが病気』とか『お母さんの仕事が休み』という言葉が入る。このほかに『お母さんは子どもとのスキンシップに務めて』という言葉も、使用頻度の上位を占める。

私は専門学校講師をしていた当時、これらの言葉はできるだけ用いないようにと学生たちに繰り返してきた。こうした言葉がどれだけ働く母親を追い詰めているかということはもとより、保育者としての専門性を自ら放棄する言葉でもあったと考⁽⁴¹⁾えたからである。」（傍点は、吉澤が付した。）

「子供がかわいそう」と言えば、働く母親が苦しむ。働く母親を苦しめてはならぬ、というのである。それでは、子供はどうなるのか？

(2) 究極的な開き直り

大日向氏の言葉をもう少し続けよう。

(41) 大日向雅美、同上、112頁。

「また母親が迎えの時間に遅れたときにも、『子どもがかわいそうですよ』という言葉が投げかけられる。これも保育者の専門性にかかわる言葉である。親が決められた迎えの時間に遅れてよいというのではけっしてない。しかし、仮に親の迎えが遅れていたとしたら、子どもにさみしい思いをさせないように楽しい保育の工夫をするのが保育者の本務である。保育者も勤務時間があるのであって、親の一方的な都合でそれが乱される問題点は、子どもの問題点ではなく、親と保育者の問題である。互いに働く者どうしの労働問題として語る姿勢が必要である。『子どもがかわいそう』という言葉で母親にせまるのは、母性を語って問題の根本をずらしてしまう欺瞞に過ぎない。」(傍点は、吉澤が付した。)⁽⁴²⁾

母親の迎えが遅れて子供がさみしい思いをしている、ということの問題にせず、母親の迎えの遅れを「働く者どうしの労働問題」と言い切る・大日向氏の態度に、筆者はひるんでしまう。大日向氏の言葉、更に続く。

「本来は母親が育てるべきところを保育者が代わっているという代理人意識がさらに深刻にあらわれるのは、子どもの病気時の対応である。保育中の発熱等で保育園からかかる呼び出しは、働く母親の最大の恐怖の一つである。『すぐ来て下さい』という保育園からの要請に、どれだけの母親が職場での立場を損うことなく応じられるだろうか。なかには迎えには来たものの、幼い子どもを家に寝かせて、また職場に戻らなければならない事例や、職場に連れて行って具合の悪い子にいつそう負担をかけてしまう事例も少なくない。」(傍点は、吉澤が付した。)⁽⁴³⁾

上の文章、とりわけ傍点を付した部分を読んでの筆者の感想はただひとつである。なぜ、そこまでして仕事を続けねばならないのだろうか？

大日向氏は、完全に開き直って、次のように述べる。

「子どもが具合の悪いときには、家でゆっくり休ませることができるよう、親の労働環境の整備が必要なことは無論である。しかし、それが可能な職場や家庭環境であるか否か、常日頃から家庭や親の仕事の実態を把握しておき、子どもの様子を見ながら保育所側で対応がとれるような処置を準備しておくのも、本来は保

(42) 大日向雅美、同上、113頁。

(43) 大日向雅美、同上、113-114頁。

育所側の務めではないだろうか。⁽⁴⁴⁾」

(3) 開き直りの背後にあるもの —— なぜ女だけが仕事を辞めねばならないのか

上〔3.3.(1)~(2)〕で論じた、『母性愛神話の罫』にある大日向氏の言葉には、とにかく驚かされてしまう。何が、大日向氏をここまでの発言に駆り立てているのだろうか？

「子供ができた時に、なぜ女だけが仕事を辞めねばならないのか」という思いが、大日向氏を駆り立てている、と筆者は解釈する。『子育てと出会うとき』の一節で、大日向氏は次のように述べている。

「子育ての中の自分を『日ごとにおばさんになっていだけ』と卑下したり、外で働く同性にいたずらに嫉妬の目を向けるのは、ほめられたことではないでしょう。子どもとともに過ごす時間にも、大きな喜びと輝きがあるはずです。しかし、それは一方で、一人の社会人として、一人の大人としての存在が自他ともに認められるという生活があってこそ、子どもの目の輝きに心弾ませることができるのではないのでしょうか。大人としての生活、社会との接点を奪われて、あたかも母と子とのカプセル空間に閉塞された日々のなかで、なおその環境に喜びを見いだせというのは、今の時代にはいささか酷なことではないかと思います。

男性と同じように学び、働き、そして遊ぶことを体で覚えて育った世代が、子どもが生まれたとたん(45)に籠の鳥にさせられてしまうのです。」(傍点は、吉澤が付した。)

(4) 負い目か？

子育てを経験したことのないフェミニスト（例えば、小倉千加子氏、上野千鶴子氏、大沢真理氏）と比べて、大日向氏の議論はだいぶ屈折しているように感じられる。同氏は次のように述べている。

「私事で恐縮ですが、この調査〔母親を対象とした意識調査のこと、吉澤註〕を実施しはじめた時点では、すでに長女が生まれ、私も一人の母親になっていました。大学院の博士課程に在籍している身で母親になったのですが、研究と子育ての両立が難しいことは覚悟していましたし、夫や近所の方の協力を得ながらなん

(44) 大日向雅美、同上、114頁。

(45) 大日向雅美『子育てと出会うとき』、36-37頁。

とかやりくりしてきました。しかし、訪問調査が始まった時点では、やはり乳飲み子がいてはなかなか動きがとれずに、遠く離れた九州に赴任していた私の両親にその間、預かってもらいながら行った調査でした。当時は私が住んでいた地域にはゼロ歳児保育も、保育ママ制度も整備されていなかったからです。各家庭を訪問すると、そこには娘と同じ年頃の赤ちゃんや可愛い盛りの幼児がいて、娘への思いが募って切ない思いもしました。自分の子も自分の手で育てずに、どうして母性の研究などをしているのかと周囲の人からいわれたこともありましたが、何よりも自分自身がそう思っていましたから、複雑な思いをかかえながらの調査でした。それでも全国調査を続けたのは、そこで出会った母親たちから聞かされた声に、どうしても母性を研究しなければという強い使命感にも似た思いを抱かされたからです。⁽⁴⁶⁾ (傍点は、吉澤が付した。)

大日向氏は、小倉氏・上野氏・大沢氏等よりは、多少は、良心的なのかもしれない。しかし、同氏の「女性と子育て」に対する診断と処方箋は完全に誤っていると筆者は考える。

4. M字型就労形態のすすめ

4.1. 新しい夫婦関係の模索

(1) 子育ての苦労と喜び

子育ては大変で、片手間でできるものではない。しかし、その喜びも大きい。父親としての筆者にとってすら、自分の子供が成長して行く姿を見ることは大いなる喜びであった。子育てに、筆者よりもはるかに多くの労力を注いでいた妻にとっては、なおさらのことであったに違いない。子育てを経験した多くの男女が、我々と同じような感想を持っていると思う。

また、例外もあろうが、通常は、男も女も子育てによって成長する。

(2) 専業主婦と夫の協力による子育て

少なくとも乳幼児の保育に関する限り、父親より母親の方が適している、ということ疑問視するのは難しだろう。従って、「専業主婦と夫の協力による子育て」がよい、と筆者は考える。妻が育児に専念することの利点として、少なくとも、①

(46) 大日向雅美，同上，99頁。

ゆったりと子供に接することができる、②子供にさみしい思いをさせないですむ、ということが挙げられる。

こういったことを考え合わせるなら、若い女性の専業主婦志向・自分の手で育てたいという願望は、非常に健全なものである、と筆者は考える。

(3) なぜ女だけが

男は子供が生まれても仕事を辞めなくてもよいが、女は子供が生まれれば仕事を辞めねばならない——なぜ女だけが、という不満がでるのはもっともなことである。

こうした不満が出てくる背景として、①女性の教育、②平均寿命の伸び、が考えられる。高等教育を受ける女性の増加は、当然、自分も男性と同じように働き（続け）たいと思う女性を増やすに違いない。また、平均寿命の伸びによって、子育てに一段落ついた後に、再び働きたいと考える女性が増える。

4.2. 女性の再就職時の条件整備

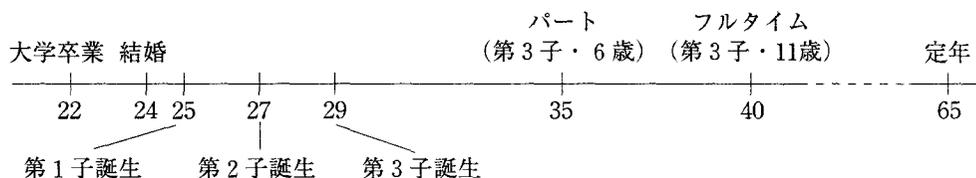
(1) 仕事を続ける女性がいてもいい

仕事が面白くなりかけた所で辞めるのは惜しい、と考える女性も多いことだろう。そういう人は仕事を続ければよい。

但し、「乳幼児期の子供を持つ母親が働いても子供に悪影響はない」などという、フェミニストの主張を信じるべきではない。子供のさみしい思いへの十分なケアが必要である。

(2) M字型就労形態のモデル

例えば、次のような女性のライフ・コースを想定してみよう。22歳で大学を卒業した女性が24歳で結婚し、25歳で第1子を産む。この時点で、2年間続けた仕事を辞める。27歳、29歳で、それぞれ第2子・第3子を産む。35歳からパートタイムの仕事に就くとすれば、この時点で、第3子は6歳になっている。第3子が11歳になる、40歳の時点でフルタイムとなれば、その後20年以上仕事を続けることができ



る。

現在の所、上述のような就労形態は一般的ではない。しかし、今日でも、子育てに一段落のついた女性の多くがパートタイマーとして働いているのだから、パートタイマーからフルタイマーへの道つけさえできれば、子育てを十分に行った女性が、仕事の面でも自己実現できる、という道が開けてこよう。